カ滞在時の一九二三年三月二六日に次のような見解を表明した。

今日、ファシズムとして知られるひとつの巨大な政治潮流が生まれ、イタリアを席巻している。ファシズムがイタリア人の運動であるかぎり我々の運動が口出しするものではなく、あくまでイタリア政府の問題である。しかし、この巨大な波が小さなユダヤ人社会を攻撃しており、しかもけっして出しゃばってもいないこの小さなユダヤ人社会が今日反セム主義に苦しめられているのだ。[7]

イタリアの対シオニズム政策は一九二〇年代半ばになってようやく変化した。パレスティナのイタリア領事が、パレスティナにとどまるべきなのはシオニズムであり、もしシオニストが自らの国家を獲得すればその時イギリスはパレスティナからただもう出ていくしかない、と結論づけたのであった。一九二六年九月一七日、ヴァイツマンは別の会議でもう一度ローマを訪問するよう求められた。ムッソリーニの対応は今回は心から歓迎するという以上の態度であった。シオニストのパレスティナ経済建設の援助を申し出たし、ファシズムの報道機関はパレスティナのシオニズムに好意的な記事を載せはじめた。シオニストのリーダーたちもローマを訪問し始めた。当時シオニスト執行部議長で一九三一～一九三三年世界シオニスト機構総裁をつとめたナホム・ソコロフは一九二七年一〇月二六日、ローマにあらわれた。ファシズム研究、ユダヤ人問題研究の専門家マイケル・リディーンは、ソコロフ＝ムッソリーニ会談の政治的結果を次のように記述している。

この最後の会談でムッソリーニはシオニズム運動から祭り上げられるようになった。ソコロフは人間

としてのイタリア人を賞賛するだけでなく、ファシズムが反セム主義の偏見から免れていると固く信じていることを披露した。さらに続けて、ファシズムの本性についてたしかに過去には不安があったかもしれない、しかし今や「ファシズムの真の性格を我々シオニストは理解し始めています。……ムッソリーニ閣下、真のユダヤ人は、あなたに刃向かったことはありません」とソコロフは述べた。

ファシズム体制に対するシオニストの承認に等しかったこれらの言葉が、世界中のユダヤ人の定期刊行物で繰り返された。ユダヤ人社会とファシスト国家の間に合法的な関係が確立されるのを経験したこの時代にはイタリアのユダヤ人社会の中央からはファシズムへの忠誠、好意表明がどっとあふれ、ひきもきらないほどになった。[8]

ソコロフの言葉にシオニストのすべてが満足したわけではなかった。労働シオニストは、社会主義インターナショナルを通じ地下潜行のイタリア社会党と緩やかな提携の関係にあり、不満を訴えたが、イタリアのシオニストは狂喜の状態であった。順風満帆できわめて宗教的なこれら保守派シオニストたちは、ムッソリーニを、マルクス主義政党やそれにくっついている同化ユダヤ人に対抗して自分たちを支えてくれる存在とみなした。ラビのサチェルドーティが一九二七年にジャーナリストのグイド・ベダリダのインタヴュー記の中で語った言葉は、次のようなものであった。

たとえば国家の法の遵守、伝統に対する尊敬の念、権威の原則、宗教的価値の発揚、家族・個人の道徳上肉体上の清潔さへの欲求、生産増進の達成闘争、したがってまたマルサス主義に対抗する闘争、等々のファシズムの教義の基本原理の多くは、まさしくユダヤ人の基本原理にほかならない、とサチ